

## 日露間の言語研究・教育環境に関する差異について

阿出川 修嘉

キーワード：外国語運用能力，外国語学習，学習環境，基礎研究，研究環境

### 1. はじめに：本稿について

本稿は、先に（2012年3月）神奈川大学において行われた、「シンポジウム・ユーラシアを研究する『日露の交流と言語教育～ロシア語の新たな国際性』」において、筆者が行った報告（『日露間の研究者を取り巻く環境の差異について ―外国語学習の成果から伺えること―』）の概要をまとめ、またその場で得られた意見、あるいはその後の考察などを加えた上で加筆、修正し、再構成したものである。

先の報告では、外国語を学習する者の成果である、実際の外国語運用能力の比較を出発点とし、そうした成果の実現を可能にしている要素の一つとして、日露間の研究者（あるいは学習者）を取り巻く環境の差異について考えてみた。

こうしたことを考えるそもそものきっかけとなったのは、先の留学<sup>1</sup>の際に、彼の国で日本語教育・学習に関わっている教員や学生たちの、外国語の運用能力の高さに直に触れたことであった。ひとつの具体例を示すと、ある国立大学において、日本語を専攻とする五年生の日本語の授業を見学する機会を得た。そこでは与えられたテキスト（新聞記事）を、ロシア語から日本語に、あるいは日本語からロシア語に訳していくというタスクが課されていた。新聞記事の読解及びその翻訳というのは一定の難易度があり、相応の言語能力がなければこなせないタスクであると思われるが、授業に参加していた学生は皆驚くべき精度で翻訳をこなしていた。その精度や使用している語彙のレベルは、日本でロシア語を専攻している同年代の学生（かつての筆者を含む）のそれよりもはるかに高いものを感じられた。双方の学生の能力自体にそう大きな差があるとは考えにくいだが、現実として、外国語の学習成果としての運用能力には大きな差があるように思われたのである。

なお、先のシンポジウム場で報告を行った際にも予め断った通り、ここでの報告は、何らかの学術的な調査に基づいて得られた知見等について述べたものではなく、筆者がモスクワに滞在した当時の自身の経験に基づいたものが主であり、その意味では「印象論」という性格に留まっていることは言うまでもない。そのため、筆者が極端な例だけに触れているという可能性もあること、あるいはまた現在では状況が変化している可能性もあることには常に留意する必要がある。

---

<sup>1</sup> 筆者は、日露青年交流センターの支援の下、2010年10月～2011年10月の期間モスクワに滞在し研修を受ける機会を得た。

したがって、先の報告、及び下で述べる本文書の内容は、今後将来的に検証されるべき項目の整理も兼ねた、あくまでも問題提起という性質が強いものであるということは予め述べておく。しかし、筆者自身がこうした内容について、従来口頭でさえも見聞する機会がなかったことを鑑みるに、このような、言ってみれば「覚え書き」をしておくことそれ自体にも、一定の価値があるものと考えている。

## 2. ロシア人学生の学習環境と日本人学生の学習環境についての比較

### 2.1. 概要：外国語運用能力の高さを実現する諸要因

前節で述べたような、外国語の運用能力の高さを実現する要因は、多岐に渡り、且つそれぞれが非常に複雑に絡み合っていることは想像に難くないが、ここでは外国語学習の成果の達成度の違いに影響を与えていると思われる要素について、以下のような点について考えてみる：

- ① 学習時間数、クラスの構成人数などに関する差異
- ② 使用している教科書に関する差異
  - (ア)教科書類の出版数の多寡とその対象とされているレベル
  - (イ)教科書で取り上げられている項目の多寡などの内容面
- ③ 使用している辞書に関する差異

外国語学習や第二言語習得における、もうひとつ重要な要因として、「統合的動機付け」や「道具的動機付け」といった、いわゆる「動機付け」という概念があるが（cf. 白井 2008: 71-77）、日本人がロシア語を学ぶ場合と、ロシア人が日本語を学ぶ場合とでは、それぞれの動機付け（より厳密には「道具的動機付け」）にそう大きな差異は無いと思われるため、ここではとりあえず脇に置くことにする（もちろん、両国の学習者の持つ「動機付け」について厳密に調査するためには、別途時間をかけた調査が必要となってくることは明らかで、別途機会を改めるべきである）。

### 2.2. 学習時間数の多寡、クラスの人数の多寡

まず、学習時間数について考えてみよう。

日本の某大学、及び大学院では、年次が上に上がるにつれて、必修として外国語学習に充てられる時間数（コマ数）が激減する。例えば、某大学の専攻語ロシア語の必修のコマ数は、1・2年次であれば、かつては週に6コマ（現在は5コマ）が用意されていたが、3・4年次では、1～2コマ程度にまで減ってしまう。また、某大学院修士課程では、2コマ程度が用意されているのみであり、同大学院博士課程に至っては、アカデミズムが念頭に置かれているためか、そうした外国語学習に充てられているコマはそもそも用意され

ていない。そのため、以降はいわゆる「自助努力」というもので、自身の専攻語に関する知識や運用能力を維持するということになる。

管見では、学部生、修士課程の学生、博士課程の学生、それぞれの段階に応じて、それぞれ異なる目的、及びそれに応じたタスクを設定した外国語の授業を提供することも可能であると思われるが（例えば、アカデミック・ライティングやプレゼンテーションに特化させたものなど）、実際にはそうした試みは全体としてされていないようである（上掲の大学では、過去に英語ではこうした内容に特化した授業が提供されたこともあったようである）。

それに対して、上述のロシアの国立大学の日本語専攻のクラスでは、五年次においても、週に3～4コマ程度は保持されているという（担当の教員の話による）。上で述べたような、何らかの特定のタスクに取り組むことに特化された授業が用意されているわけではないが、少なくともかなりの時間数が最終学年であっても確保されているという点で差がある。

「外国語」として学習された言語は、絶えず運用していない限り、記憶が薄れ、応じて運用能力も落ちていくことは、経験則からも明らかであろう。使わない能力が衰えていくというのは、外国語の運用能力についても同様であるため、衰えさせないためには使う機会を増やすしかないが、それを、自助努力が継続できるかどうかという個人の資質に全く委ねてしまうか、必修の授業という形で半ば強制的にでもそうした機会を設けるかという部分で、日本とロシアの大学のカリキュラムでは大きな違いがあると言える。

もちろん、日本の大学の場合、特に三、四年次などの場合には、学生はいわゆる「就職活動」というものに従事しないといけないので、その負担との兼ね合いも考慮しないといけないという事情もあり、単純に大学内の事情だけで容易に解決が図れる種類の問題ではないということが、状況をより複雑にしているとも考えられる。しかし、外国語学習に充てる時間数に大きく差がついてしまっているというのは事実だろう。

また、外国語学習の授業を開講する際のクラスの人数に関しても違いがあるようである。ロシアの某国立大学では、外国語の授業の際には一定人数を超えてはいけないというような規定があるそうだが、日本の大学では、たとえ専攻語として学ぶ場合であっても、そのような規定を設けて授業を開講しているという話は耳にしたことがない。そのため、専攻語の授業ともなると、30～40人から成っているということも往々にしてある。外国語学習というプロセスを考える際に、どちらがより効果的かは火を見るよりも明らかである。

## 2.3. 使用している教科書に関する差異

### 2.3.1. 出版数の多寡とその対象とされているレベル

出版されている教科書のタイトル数とその対象とされているレベルについてはどうだろうか。

大まかな比較しかしていないものの、出版されている数に関して言えば、日本で出版さ

れているロシア語教科書と、ロシアで出版されている日本語教科書とでは大きな差異はなさそうである。入手できるか否かという基準を考慮すれば、日本で出版されている教科書の方が数としては多くなってしまうかもしれない。

しかし、両者の間で決定的に異なるのは、教科書が対象としているレベルの多様さだろう。日本で出版されているロシア語教科書は、圧倒的に初級者向けのものが多く、更に進んだ学習を行いたいという場合、極端に選択の幅が狭くなってしまうというのが現状である<sup>2</sup>。それに対して、ロシアで出版されている教科書、例えば Нечаева (Людмила Тимофеевна) の手に成る教科書であれば、初級者向けのもの (Нечаева 2001-2002) に加えて、上級者向けのもの (Нечаева 2009-2010) も用意されている。一通り文法を習い、さらにその先の運用能力を高めるための教科書が用意されている。

### 2.3.2. 内容面、取り上げられている項目の多寡など

上で見た、教科書のレベルの問題とも関連してくるが、教科書の内容面について考えてみる。

また、日本で出ているロシア語教科書の場合には、あちらで普通に用いられている表現が収録されているものが少ない。これは用いられている単語の頻度数の高低、あるいは基礎的な語彙か否かとは関係がない。例えば、「Как у вас сегодня со временем?」といったような、文を構成している語それ自体は決して難解ではない文でさえ、きちんと扱われている教科書は、筆者の知る限りでは存在しない。また、口語表現についても、不足が目立つ。例えば、「Ничего себе!」、「Вот это да!」、「С ума сойти!」といった表現、あるいは「С покупкой!」といったような表現など、母語話者が普通に用いている表現でも、教科書に収録されていないことが多い<sup>3</sup>。ため、教科書をどれだけきちんと学んでいても、発話を聞いた際に咄嗟に意味が理解できない、というような場合が間々ある。こうした表現が、基礎的な項目の理解を通じて自然と理解できるようになるように編まれ、適切に導くような説明がされている教科書も恐らくないので、これらの表現は、もう少し教科書内で直接取り上げられていてもいいのではないだろうか。現状では、こうした表現を身に付けたいと思うと、別途そうした表現の紹介に特化した教科書などで習得しなくてはならないが、よく耳にする表現を、初級者向けの教科書に含めるべきではないという理由についての見当が付かない。

また、日本で出版されている教科書に共通する特徴として、練習問題が極端に少ないという点も挙げられるだろう。初学者が経なくてはならないプロセスとしては、文法知識を得るプロセスと、そこで得られた知識を、一定量の反復練習を行いながら実際に運用してみることで定着させるというプロセスの双方が必要であると考えられるが、この後者のプ

---

<sup>2</sup> しかしながら、筆者がシンポジウムで報告を行って以降のここ数年で、臼山 (2012)、吉岡他 (2013)、藻利他 (2013) などの、基本文法を終えてそこから継続して学習するための、様々な趣向を凝らした教科書が続々と出版されており、少しずつでも状況は変わりつつあるようにも感じられる。

<sup>3</sup> また、そうした表現に特化した教科書も、日本語で書かれているものは、過去に出版されていたものを含めても、極めて数が少ないと思われる。

ロセスを行うための方法が用意されていない場合が多い<sup>4</sup>。

それに対して、上述の Нечаева の教科書では、口語体もカバーされており、また知識を定着させるための練習問題も多く付されている<sup>5</sup>。

## 2.4. 使用している辞書に関する差異

次に、学習時に使用している辞書に関して考えてみよう。

上述の五年生のクラスのロシア人学生が使用していた電子辞書は、カシオ製のもので、したがってロシア語の辞書のコンテンツとしてはコンサイスが利用されていた。日本でもよく知られている Зарубин と Рожецкин による和露辞典も、未だに紙媒体で発行されているものの (cf. Зарубин, Рожецкин 2010)、高価であり、サイズや取り扱いの容易さなどの面でも、電子辞書と比較してしまうとやはり不便であるという理由からか、教室内では目にすることはなかった。

他方、日本人の学生に関しても、電子辞書を使用している学生数はかなり増えている。自宅では従来の紙の形の辞書を利用しているのかもしれないが、少なくとも教室内では電子辞書の利用率が高くなっていることは見て取れる。電子版の辞書の持つ利便性は、紙の辞書のそれに比べて圧倒的に優位であることは疑いようの無い事実であるため、今後こうした傾向は増加こそすれ、減じることはないだろう。

しかしながら、日本人がロシア語を学習しようと思う場合、あるいはロシア人が日本語を学習しようとする場合には、電子辞書を使用することで生じてくる新たな問題がある。現状では、電子辞書という端末に提供されている、電子版のロシア語の辞書（露和辞典、和露辞典）は、「コンサイス（井桁編 2003, 2005）」と「ロシア語ミニ辞典（安藤他 1997）」しかない。周知の通り、双方の辞書はともに、初級者の学習用途に適うように編纂されている辞書では必ずしもない。

そのため、電子化されているのがこれらの辞書のみであり、電子辞書を用いることが当たり前となっているような層の学習者が、新たにロシア語あるいは日本語を学ぼうと思った場合、これらの辞書が最初に触れる辞書となってしまうという状況は、決して望ましいとは言えないだろう。

このように、学習者が使用する辞書という観点から見ると、状況としては双方ともにそ

---

<sup>4</sup> しかしながら、このことは、以下の第4節で後述する、出版に際しての諸々の制限に依るところが大きいものと予想される。

<sup>5</sup> また一方で、同じ教科書では、日本人が通常の言語使用ではそう用いることがない、諺の類いが多数採用されているという側面もある。ロシア語の言語活動では、諺を引くことが間々あるので、その影響で日本語の諺も豊富に紹介されているものと思われるが、実用面を重んじるのであれば、日本語を学習する際には諺などには必ずしも重きを置く必要はないと筆者自身は考えている。知識としては持っていて、それを日常のやり取りの中で用いる日本人はそう多くないと思われるからである。もちろん、言語文化に重点を置いた地域研究（いわゆる лингвострановедение）という観点からすると、諺を学ぶことは重要ではある。



う大きな差はないとも見ることができ、日本人の学生、ロシア人の学生の双方にとって必ずしも良い状況ではないと言えるだろう。上でも述べた通り、電子版の辞書の利便性は否定できず、また、コスト面を考慮しても、紙の辞書に逆戻りするような状況は最早考えられないので、内容面で充実した露和辞典、和露辞典の電子版をリリースすることは急務である。

### 3. 基礎研究としての言語研究について

#### 3.1. 言語研究を行う環境面についての比較の試み

ここまでで見てきたような、外国語教育・学習の成果に、言語研究の応用的側面の充実が反映していると考ええるならば、こうした充実を下支えしているのは、基礎研究の充実であると考えられるだろう。

ここでは、以下のような点について、日本とロシアの、言語研究を行う環境面について、手元にある断片的な情報を元に比較を試みてみる。

- ① 研究に従事できる機関
- ② 研究者に確保されている時間
- ③ 教科書などの教材作成が正当に評価される土壤があるか

まず、上記①の、研究に従事できる機関について考えてみると、日本においては、いくつか設置されている研究所類（例えば国立国語研究所など）を除いては、言語研究に従事できる機関は大学しかない。事情をロシア語研究、あるいはもう少し広げて英語以外の諸外国語に限ってみても、なおのこと大学以外で専門に研究活動を行っているところはないだろう。

また、ひとたび大学から籍を抜いてしまうと、図書館の資料へのアクセス、あるいはアクセスできる資料の範囲も大きく制限されてしまうのが実際である（それでも最近は状況が変化しつつあるようではあるが）。

それに対して、ロシアでは、大学に加えて、ロシア科学アカデミー所管の、各種の研究所が存在している。言語学関連の研究所で主立ったものだけでも、「ヴィノグラードフ記念ロシア語研究所（Институт русского языка им. В.В. Виноградова РАН；モスクワ）」、「言語学研究所（Институт языкознания РАН；モスクワ）」、「東洋学研究所（Институт востоковедения РАН；モスクワ）」、「言語研究所（Институт лингвистических исследований РАН；ペテルブルク）」などがある。また、ロシア国立図書館などの資料へのアクセスは特に制限が設けられていないため、モスクワにいる限り、専門書にあたることは可能だろう。

こうした研究所があることの利点としては、研究に従事することのできる場所が大学以外に増えるということに加えて、当該研究分野の専門家に何か照会する際に、これらのア

カデミー所管の研究所が最初の窓口として機能するという事ではなかろうか。あるいはまた、研究を進めるにあたって必要となってくる地道な作業で、且つ一人では手に余ってしまうようなタイプの作業なども、専門分野を共通にする研究者とコンタクトをとりやすい環境があるため、必要に応じて作業の分担などもしやすいだろう<sup>6</sup>。

日本の場合には、研究者として籍を置こうと思えば、原則として大学に籍を置く必要があり、結果として、分野を同じくするにも関わらず、専門家がそれぞれ全国各地に分散してしまわざるをえないという状況になっている。このような状況下では、ある研究分野の専門家が、どこの研究機関（大学）に在籍しているかということの把握から始めねばならず、この時点で既に煩瑣を伴う<sup>7</sup>。またあるいは例えば、共同で何らかの作業やプロジェクトをやろうと思っても、まずその中心をどこに置くかというところから定める必要があるため、余計な労力がかかるように思われる。

次に、上記②の、研究者に確保されている時間について考えてみる。ここでは便宜的に、一週間に担当している授業のコマ数を元に両者の比較を試みてみよう。

日本のとある大学に在籍している研究者の例を考えると、学部生向け、大学院修士課程の学生向け、博士課程の学生向けの授業、それ以外の専門に関する授業など、合計で8～9コマ程度は担当していたように記憶している。それ以外にもオフィスアワーとして一コマ分は別途確保する必要がある。これらの授業と、その準備、更には大学運営に関わる学務なども加わってくる。それに対して、ロシアの大学の教員の担当コマ数は非常に少ない。筆者が調べた当時は、最も多くコマを持っている教員でも5コマ程度であった。もちろん、これも別途正確な調査が必要な事項だが、職位が上がれば、それに依拠して担当するコマ数も減っていくように思われる。

単純にこうした状況を見るに、研究者が優れたアウトプット（成果）を行うために必要となってくるはずの、インプットを行うための時間を確保するという点で、両者の間には大きな差があるように感じられる。

しかしながら、この点については、ロシアの場合には、日本の大学等であれば事務職員が作成するような性質の文書まで教員が作成しなければならないという事情があるようで、その点を考慮すると、日本の場合よりも負担が大きいとも考えられる、という指摘も報告後に得たので、一概に評価することは難しい。また、日本とロシアにおいてはそもそも雇用のあり方が全く異なっている可能性もあるため、そうした要素も今後考慮した上で調べ

---

<sup>6</sup> これが日本人のメンタリティと相容れるかどうかという点は、また別の問題として扱われる必要があるだろう。

<sup>7</sup> 日本の学術振興会が付与する「研究者番号」がどのような形で管理されているのか筆者は寡聞にして知らない。専門領域などを示す何らかのメタデータ（属性）を付与してそれぞれの研究者を管理しているのか、またそうしたメタデータが付与されているのであれば、どの程度の下位区分にまで分類されているのか、またこうした情報がどの程度公になっているのかなど、それに依拠して状況は大きく変わっているが、少なくとも筆者が大学院に在籍していた当時は、こうした情報の有無などについて議題に上ったことはなかった。

ていく必要は出てくるだろう。

最後に、教科書などの教材作成が正当に評価される土壌があるかという点（上記③）について考えてみよう。日本の場合には、教科書や辞書といった分野は、実績としては高く評価されないという。これについても、そうした評価の低さはロシアにおいても同様であるというコメントを報告後に頂いた。

想像するに、これは日本の場合にも、ロシアの場合にも、アカデミズムにより重きが置かれているからであると考えられる。どちらに重きを置くかは個々人で見解が分かれるところだろうが、私見では、言語研究に関して言えば、応用分野へと転用できない基礎研究は存在意義が考えにくいし、基礎研究無くしての応用は不可能である。相互に影響を与え合うはずであるし、そうあるべきである。一方の軽重を問える類いの問題ではないだろう。

こうした、教科書や辞書が成果として高く認められないような状況に研究者が置かれているというのが事実であれば、教科書や辞書の執筆に取り組もうとする人が減ってしまい、これらの発展が鈍化していくであろうことは想像に難くない。すなわち、学習用教材や辞書の編集・執筆には多大な労力がかかる、労力がかかるが業績としては高く評価されない、かかる労力の割に評価されないのであればわざわざ進んで取り組まない、誰も取り組まないで作業が進まず既にあるものは古びていき、作業に際しての新たなノウハウも蓄積しない、最終的には人材も育たない、というような、一連の負のスパイラルに陥っているというのが実際のところなのではないか。こうした状況があることによって、最終的に最も被害を被るのは、学習者（あるいは潜在的学習者）であることは言うまでもないだろう。

今ここで考えてみたような、研究に取り組める機関がそもそもあるのか、研究者が研究に注ぐ時間は確保されているのか、そして成果を成果として正当に評価されるのか、といった要素のどれが欠けても基礎研究の充実は実現しないだろう。

### 3.2. 言語研究の成果に関して

上で見たように、言語研究を行う環境については、研究所などの学術機関に関する点を除けば、日本とロシアの状況に、そう大きな差はないと考えることもできるだろう。しかしながら、双方の言語研究の成果について考えてみると、両者の間には大きな差異があるように思われる。

ロシアにおける理論研究の成果物としての端的な例としては、Алпатов（Владимир Михайлович）らによる、日本語文法に関する大部な理論研究が挙げられる（Алпатов, Аркадьев, Подлесская 2008）。それに対して日本では、規模という点だけでも、これほどまで大部なロシア語の文法書は、日本人のロシア語研究者によって執筆されたものとしては、管見では残念ながら出ていない。

このことだけ見ても、基礎研究のレベルの格差を否が応でも感じずにはいられないだろう。もちろん、上の理論書も、内容面で問題を含んでいる可能性もあるのかもしれないが、



現状に照らすとそうしたことは些末なことに過ぎないとも言える。むしろ、成果が結実し、出版物という形で公になっているということそれ自体こそが重要であると思われる。環境面でそう大差がないのであれば、同様の成果が上がっていてしかるべきである。しかしながらそうになっていない以上、両者の間には何らかの、恐らく決して小さくはない差異が存在していると考えざるを得ない。

#### 4. 結語に代えて

ここまでで、学習者及び研究者を取り巻く状況について、日本とロシアのそれぞれの状況の、極めて大まかな比較を試みた。主に以下のような点について比較しつつ考えてみた。

- ① 授業のあり方に関する比較
  - (ア) 学習時間数の多寡
  - (イ) クラスの人数の多寡
- ② 使用している教科書に関する比較
  - (ア) 教科書類の出版数の多寡
  - (イ) 教科書が対象としているレベル
  - (ウ) 内容面、教科書で取り上げられている項目の多寡
- ③ 使用している辞書に関する比較
- ④ 基礎研究としての言語研究を行う環境についての比較
  - (ア) 言語研究を行う環境面
  - (イ) 言語研究の成果

言語研究の応用的側面の成果について考えるにあたり、外国語学習の授業を構成するいくつかの要素(上記①, 授業のあり方に関する比較), また応用研究の具体的な成果として、教科書(同②, 使用している教科書に関する比較)や辞書(同③, 使用している辞書に関する比較)に着目して考えてみた。また、こうした応用面で上がっている成果を可能にしている要因として、基礎研究の充実を想定し、それを助長するための研究を行う環境などについて見た(同④)。

本節では、本文書のまとめとして、ここまで見てきたことを踏まえて、今後どのように状況を改善に向かわせられるかということについて考えてみる。

まず、授業のあり方や教科書のあり方といった、外国語学習に関しては、既に陳腐な趣さえ感じさせるものの、詰まるところ、「教養」としての外国語学習と、「実学」としての外国語学習という二つの側面を想定して、そのどちらを選択するかという点に集約させて考えることもできるのかもしれない。つまり、日本の現状は、外国語学習という知的作業の、教養的側面が余りに重視され過ぎているため、もう一方の側面に沿って学習すること

が困難な状況となってしまうている。従来は前者の側面だけで事足りていたが、現在は学習者の目的が多様化しており、既に既存の学習環境だけでは対応できなくなっている。したがって今後は、学習者の目的に応じて、場合によっては実学として学ぶという側面をもっと重視し、内容面でも補っていく必要があるのではないだろうか。

このような観点に立ってみると、現状では不足が目立つ。以下、実学的側面を重視することを念頭において考えてみると、まず、授業のあり方に関しては、ロシアで行われているように、学習者の数を一定数に限定することは有益だろう。そうすることで、学習者一人が当該外国語の発話に曝される量は単純に増えるからである。また、日本人のメンタリティとして、教室の構成人数が多くなると、それに応じて心理的に発言しづらくなるという傾向は、未だに、とりわけ学生などの間ではあるようなので、そうした心理的な障壁を減らすことにもつながってくるという意味でも重要であろう。

また、先の報告では触れなかったが、母語話者の教師と非母語話者の教師がいる場合の、役割分担についても、今後より深い議論が求められてしかるべきである。せっかく母語話者と非母語話者の教師が揃っていても、授業を実施するにあたって両者の役割分担が上手く行っていないと思われる例は多い。

次に、教科書に目を転じてみると、より言語の使用実態を反映したものに改めていけば内容は自ずと充実していくだろう。上に例として挙げたような、基礎的な語を組み合わせた表現についてはもっと触れるべきであるし、口語的な表現についても、現地に赴いて困らない程度には含めてよいのではないだろうか。

また、反復練習を行うための練習問題をもっと多く含めるべきだろう。もっとも、この点に関しては、練習問題が多いことが必ずしもいいとは限らないという場合もあるというコメントも、先のシンポジウムの後に頂いた。つまり、教科書に練習問題が用意されていることで、かえって、教師が自由に問題をその場その場で用意して練習させるということがやりにくくなる可能性があるという。

しかしながら、これは、母語話者が教師となる場合、または非母語話者が教師となる場合とで、捉え方が異なってくるようにも思われる。もし、教師が当該外国語の母語話者であれば、練習問題の豊富さというものはかえって自由度を奪ってしまうものになってしまうだろう。しかし逆に、当該外国語を担当する教師が、その外国語の母語話者ではない場合には、誤りを含んだ文に学習者を曝してしまう可能性を排除するという意味では、母語話者による適切なチェックを経ている練習問題が教科書内に多く用意されている方が、都合がいいだろう。

このように、「実学」としての外国語学習という側面を重視して考えると、その学習目的に適う教科書は少ないと言わざるを得ない。しかし、今求められているのは、このまさに後者の側面を重視して編まれた教科書なのではないだろうか。問題は、初学者向けの教科書そのものにあるのではなく、そうした教科書ばかりがあるということであり、更に上の

語学力を身に付けたいと考える人のための教科書が十分に提供されていないということにあるのである。

上で述べたような点が、今後の教科書作成の際には念頭に置かれるべきだろうと考えられる。しかしながら、このような意図をもって教科書を執筆したいと考えても、そうした意図の実現を困難にする外的要因もあるようだ。例えば、日本の出版社から教科書を発行しようとする際に、出版社によっては、割ける予算などの問題から、執筆に際して事前にページ数について制約が設けられることがあるという。本末転倒の感を覚えざるを得ないが、それが現実であり、現在発行されている教科書は、そうした制限の下に書かれており、そのため内容面でも（特に練習問題をどれだけ収録するかなど）制限を受けてしまっているという可能性もある。このような外的要因をどれだけコントロールできるかという問題は大きい<sup>8</sup>。

予算面に関して言えば、その不足を補うために、一方では民間の団体、あるいは各省庁の外郭団体などから、教科書作成に際して補助金を得るという可能性も考えることができるだろう。こうしたことは、特に日本語教科書の作成では多く見られる事例であるという<sup>9</sup>。ロシア語の場合には、そうした助成を行っている団体を探すところから始まることになるのだろうが、こうした方法は、今後もっと試みられる価値はあるだろう。

出版のコストを下げるという観点から言えば、教科書の出版の形態を紙の形態から電子版に変えてしまうという方法もあるだろうが、残念ながら現状では、たとえそれが、紙から電子版にという、単なるフォーマット面の変更のみに留まっていたとしても、電子版に変えてしまうというだけで読者層を限定することになりかねず、これはややもすると、教科書を本当に必要としている層に届けられなくなってしまうという可能性も出てくる。しかし、紙ベースでの出版がより厳しいという状況になれば、電子版での出版という選択肢は今後考慮しないわけにはいかなくなるだろう。

そして、辞書については、上でも述べた通り、内容のより充実した辞書の電子版が求められる。コンサイスなどのような、そもそも紙の辞書の状態で携帯性を重んじているタイプの辞書は、スペースの都合上、どうしても語釈や例文などを省略されてしまうため、それをそのまま電子化しても、そのマイナス面ばかりが目立ってしまう。

それと同時に、既存の辞書の情報の更新も必要となってくるだろう。日本で出ている最も大部な露和辞典である、研究社露和辞典（東郷他 1988）は、出版年が 1988 年であり、その次に規模の大きい辞書である、岩波の露和辞典（和久利他 1992）にしても、1992 年の出版である。どちらの辞書も、既に出版から 20 年余の時間が流れてしまっている。この

---

<sup>8</sup> しかしながら、その一方で、日本におけるロシア語教科書の需要と、ロシアにおける日本語教科書の需要とで、そう大きな違いがあるとも思えないことを考えると、両国の出版事情の差異についても考慮する必要があるのかもしれない。

<sup>9</sup> この点についても、シンポジウムの当日に会場からコメントにより教えて頂いた。また、本文で言及している *Нечаева* の教科書もこうした補助を受けているそうである。

間に、ロシア語の語彙体系に入った語、または廃れてしまった語や語義といったものは相当数に上るだろう。そうした要素を反映させた辞書の登場が待たれる。

また、近年の情報科学の技術発達に応じて、ここ数年の言語コーパスの発展も目覚ましい。こうしたものを利用した上で、辞書の項目を記述するという試みも一層試みられるべきであろう。また、SketchEngineのような、辞書の項目の記述を、円滑に、且つ内容的にも充実する形で作業を進めていくためのオンラインのツールもリリースされており<sup>10</sup>、執筆に伴う労力を以前よりは遥かに軽減することが可能になりつつある。

こうしたアウトプットの一層の充実を目指すために、それを可能にする環境面も整備していく必要があるだろう。まず、言語研究に取り組める場所を増やすことが必要だろう。そうすることで、研究に関わる人間が増えてくれば、個人にかかる負担も軽減され、ひいてはインプットに充てる時間の増加にもつながってくるだろう。そして、応用分野に取り組む研究者が増えてくるためには、教科書や辞書といった具体的な成果も、理論研究と対等に評価されるようになることが望ましい。

もっとも、上でも述べたように、見方によっては、双方の環境とも、大きな差異はないのかもしれない。しかしながら、もしそうであったとしても、双方の学習者の外国語運用能力における大きな差異や、理論研究の成果物の有無といった差異は現前と存在しているのである。そうした差異を産んでいる要因を果たして何に帰して説明すればよいのかという、この点については今後検討していく必要はあるだろう。

繰り返しになるが、冒頭にも述べた通り、先の報告、及び本稿の内容は、問題提起としての位置付けしか持っていない。今後、より体系的に捉え直し、適切にいくつかの問題に切り分け、課題の再設定をした上で、改めて調査を行い、考察を加えていくというプロセスを踏む必要があることは言うまでもない。これを実現するためには、相応の時間と労力が求められるが、筆者の置かれている現在の状況を考慮すると、短期間でこれらについて検証を行うことは不可能である。しかしながら、将来何らかの形で、本稿で指摘した諸々の点について検証を行う機会が得られることを期待しつつ、同様の問題意識を持って今後もこれらの点には注目していこうと考えている。

なお、筆者は、専任として大学の内部にいる人間ではないため、当然のことながら、内部の事情についてつまびらかに知る立場にはない。そのため、先の報告、及び本稿には、筆者の持ち合わせている情報の不足から来るものや、大きな誤解に基づいた、不正確な記述を多数含んでいるだろうと思われる。本文書で述べた内容に関して、不足や誤りなどがあれば、今後の検証の機会に活かすためにも、御指摘を頂ければ幸いである。

## 5. 文献

安藤厚，大西郁夫，栗原成郎，灰谷慶三，藤家壮一，松井俊和，望月恒子，タチアナ・ヴ

---

<sup>10</sup> URL は以下：

<http://www.sketchengine.co.uk/>

- ラーソワ（編）．1997．『ロシア語ミニ辞典』．白水社．
- 井桁貞義（編）．2003．『コンサイス露和辞典（第五版）』．三省堂．
- 井桁貞義（編）．2005．『コンサイス和露辞典（第三版）』．三省堂．
- 臼山利信．2012．『口が覚えるロシア語』．三修社．
- 白井恭弘．2008．『外国語学習の科学 ― 第二言語習得論とは何か』．岩波書店．
- 東郷正延，染谷茂，磯谷孝，石山正三（編）．1988．『研究社露和辞典』．研究社．
- 藻利佳彦，バソヴァ・オリガ，山内真，吉見薫．2012．『耳が喜ぶロシア語 リスニング体得トレーニング』．三修社．
- 吉岡ゆき，セルゲイ・チローノフ．2013．『気持ちが伝わる！ロシア語リアルフレーズ BOOK』．研究社．
- 和久利誓一，飯田規和，新田実（編）．1992．『岩波ロシア語辞典』．岩波書店．
- Алпатов В.М., Аркадьев П.М., Подлесская В.И. 2008. *Теоретическая грамматика японского языка. В 2-х книгах*. Москва : Наталис.
- Зарубин С., Рожецкин А. 2010. *Большой русско-японский словарь*. Москва : Живой язык.
- Нечаева, Л.Т. 2001-2002. *Японский язык для начинающих. Ч. 1-2*. Москва : Московский Лицей
- Нечаева, Л.Т. 2009-2010. *Японский язык для продолжающих. Ч. 1-2*. Москва : Московский Лицей



## 日露間の言語研究・教育環境に関する差異について

阿出川 修嘉

先に筆者が研修のために滞在したモスクワにおいて、高い外国語運用能力を持つロシア人や、質の高い教科書、あるいは文法研究の成果物としての理論文法書などの様々な成果に触れるにつけ、日本でのそれとの間にある、俄には埋めがたいほどの差異は、一体どのような要因によって生じているのかについて考えを向けざるを得なかった。

本報告では、ロシアの教育・研究機関において、このような外国語学習の高い成果や、あるいはそれを支える言語研究の進展を可能にしているのはどのような要因なのか、またそれを踏まえた上で、将来的にロシアと日本の状況を比較・検討していく事項をまとめるため、言語研究の応用的側面と、基礎研究の側面に大きく分類した上で、日露双方の置かれている状況の差異について考察した。

まず、言語研究の応用的側面に関する差異としては、①授業のあり方に関する比較（本文 2.2.）、②教科書に関する比較（本文 2.3.）、③辞書に関する比較（本文 2.4.）をそれぞれ試みた。①に関して言えば、ア）学習時間数の多寡と、イ）クラスの人数の多寡に関する差異が大きく影響している可能性がある。ロシアでの教育機関では、学習時間が日本よりも多く、また一クラスあたりの構成人数も少なくなっており、外国語の学習効率を高めることが念頭に置かれ、そうした環境が実現できている。②の教科書に関する比較に関しては、ア）教科書類の出版数の多寡、イ）教科書が対象としているレベル、ウ）内容面、教科書で取り上げられている項目の多寡といった差異について考察した。ロシアで出版されている教科書は、レベルが多岐に渡っており、また扱われている内容も幅が広いのに対して、日本の教科書は初級者向けのものが圧倒的に多く、また内容面でも、よく用いられる表現が扱われていないなどの偏りが感じられる。また、③の辞書に関する比較については、学習者が電子辞書を用いる昨今では、電子化されている露和辞典、和露辞典に限られていることから、双方とも理想からは遠い状況にあると言えるため、大きな違いは無いだろう。

次に、こうした応用的側面を下支えしている、言語の基礎的研究の進展をめぐる差異については、1) 基礎研究としての言語研究を行う環境面についての比較（本文 3.1.）と、2) 言語研究の成果についての比較（本文 3.2.）を試みた。まず、1) については、①研究に従事できる機関、②研究者に確保されている時間、③教科書などの教材作成が正当に評価される土壌があるか否かといった点について検討した。研究機関に関してはロシアの方が数としては多く、また研究活動に充てられる時間も多いように思われる。2) の言語研究の成果として、ロシアでは大部な日本語文法理論の研究所が出されているが、日本でそれに匹敵するようなロシア語の研究書は未だ出されていないことから、大きく水をあけられていると言わざるを得ない。

総じて、双方の置かれている環境とも一長一短と言えるのかもしれないが、しかしながら、それでもなお、言語研究の成果である文法研究や、あるいは教科書の出版といった成果物、また外国語教育の成果である学習者の外国語運用能力の高さなどにおける大きな差異は厳然と存在していることを認めざるを得ない。今後も、こうした諸要因について注目しつつ、両者の差異についての情報収集を積み重ね、調査を行うための準備を進めていきたいと考えている。